

tab

No.
19

2009
/ 11
/ 15

木村和史 / 石川和広 / 野村龍

長尾高弘 / 水島英己 / 福島敦子

高塚謙太郎 / タケイリエ / 倉田良成

游 = Machilus thunbergii

cont.

詩篇

- 長尾高弘：事後的に／01
水島英己：紙背文書のためのヴォカリーズ／02
野村龍：短編小説／03
石川和広：休息／04
タケイリエ：貝塚／06
高塚謙太郎：ハボン絹莢／08
福島敦子：空・青／10
倉田良成：歎けとて―私の小倉百首から／12

文

- 木村和史：野生の子猫／14
倉田良成：もうひとつの南島 ――清水あすか詩集『毎日夜を産む。』読解・後編／16

あとがき集／21

画：和田彰

tab 第19号／2009年11月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

〒230-0078横浜市鶴見区岸谷4-25-25鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis111@k3.dion.ne.jp



Der Doppelgänger

Jan
2009

事後的に

ついに眼だけの存在となつて、
ふわふわと漂つていった。

前と同じように、

日の光がさんさんと降り注ぎ、

草木が風になびいている。

音がしないというのは、

不思議なものだ。

何もかもが、

まるで平和であるかのように見える。

川を渡ると、

人の姿が見えてきた。

あの男もいる。

あんなことをしたのに、

何事もなかったような顔をしている。

口を動かしているから、

何かしゃべっているのだろう。

おれのことなど、

眼に入らないらしい。

でも、こうなつた今は、

もうどうでもいいことだ。

欲望というものもなくなつたらしい。

何をしたらよいのかわからないままに、

何を見たいということもなくて、

さまざまなものが眼に入つては消え、

ただいつも何かが見えていた。

水島英己

紙背文書のためのヴォカリーズ

さあ、16号のバイパスの、浅川橋の上で

気を失うというのは、どういうリズム音痴のせいか、と

母は乳の涙の谷間をステージで揺らしながら水をはじくのだった

それいらいきみは狂水病になった、感情の水を畏怖せよ

古今、後撰、拾遺、各五首撰へ

源家長が書いた後鳥羽の院宣の裏に定家は日記を書いている

後鳥羽の文書こそが紙背になる

表裏逆転のあやかし

だるい午後、死にたくなる、浅川橋の上

牛とぼくの勾配

永遠の非望の、おわりのはじまりの眠り

父は黙して、ただ

しぬべくおぼゆ、などと

きみの顔に墨痕淋漓と垂れ流した

野村龍

短編小説

ココアの季節には

蝙蝠達が 泉の光を吸いに飛んで来る

溺死した花束の蜜は

少しばかり苦い

女王の指先から 狂った炎が滴る時

黄金の蜘蛛の糸を 野薔薇の歌が伝う

生きている時に 覚え切れなかった呪文を

方舟に詰めて流す

柔らかな歯車がつくる日陰で

しずかに溶けていく鱗の群れ

言葉の塊を

蛹はうまく呑み込めない

赤い旅人が

伝説を抱えて 不意に帰って来る

村はずれ

朽ちてゆく巨神兵の骸の傍らに

気高い天球儀の魂が

無造作にひとつ 転がっている

休息

生きていくのに休息なんてない

そう思っていたし、今もどこかでそう思っている

昼休憩や休日はあっても

休みなくあちこちが動いている

臓物とか血とかも高速道路も

それが固まりになるまでは固まりじゃないんで

どこかで変形し、しなり、痛み、治す

ものは結合する力であるかもしれないが

もしその間に連絡や空間がなかったらたぶんいけないのだろう

固まりきって死んでしまうのだろう

そんなこと意識しなくて電車に乗ったりしているけど

時々気づいたら息をするのを忘れている

息をゆっくりしながらじゃないと肩が凝るのを実感する

いつのまにか固まりになるうとしている

全部固まって死んだらヤバイ

グーグルで検索する グーグルでなんかわからんしょうもないことを

検索する ヤバイ こんなことしている場合ではない

けども、こんなことをしていてもいいじゃないだろうかと思う 外耳炎について調べる
耳が痛いからだ

近くの四〇年くらいたつ耳鼻科にいったらおじいちゃんがでてきて

なんか消毒して耳に脱脂綿つめられた

それだけではなんか不安なので

その息子さんの診察の時に二回ほどいった

「耳かきはなるべくしないほうがいいですか」

「なるべくじゃなくてもうしないほうがいいです」

「耳にも臓器があります。あなたの耳の中の皮膚は弱く炎症を起こしやすくなっています」
検索結果と同じことをいうからたぶん事実なんだと思う

耳にも臓器がある…

耳が死んではいけない 痛めつけてはいけない

当分耳かきは休むことにする

貝塚

わたしたちには排水が必要だったから
手を繋ぎあつて泥のなかにとびこんだ
そしてすっかりおぼれておたがいのその
どろどろをなめあつていればよかった
だからといって

かるがるしく及ぶのではないよ

前髪の伸びる先は地獄だった

葉っぱ 太陽 しずく 酸素

などをふところに詰めこんで

役行者にまもられながら

わたしたちは たかく飛びたつた

鼻がへし折れそうなほど風が

はげしく猛つた山にかかるがるしく

薄着でのぼる愚かさについて話しあい

わたしたちは肉と霊のことも

もちろん知っていたが

からだはとつくにあふれ

あたりいちめんが水びたしになったので

野の花がしおれないように

スカートを脱いで

原っぱのことも拭いてやった

ねむる場所の石枕はつめたくて良い味がした

おなかが空いたのでイタドリを食べ

それがあまりに酸っぱくて吐きそうになった
脚が濡れてきて膝まで沈むので

わたしたちはだんだんと丸くなった

それですつと屈んで臍をみていてやっとなかった

「せかいの根源がこれか」

とわたしは喉をしぼるように言っ

それぞれの臍のなかに隠れていた巻貝などを

でろでろと掘り出して

煮たり焼いたりして食べつくした

それから殻を投げあっているうちに

わたしたちの唾液腺はすっかりきれいになって

山になった貝塚のなかで睦みあうことを

おたがいにゆるしたのだった

高塚謙太郎

ハボン絹莢

焦土の梁に立つ、絹莢追分

。て、Yマール、の地帯へ

末広がりの、ゼロ・日章旗

匂い立つ、精粹

日本人の気持ちになりたい。上着の袖口から出ているもの、それ自体で撫でる、そして気持ち、に麗しき日本人の。日本人の袖口から出ている気持ちの、それ自体で濡れる、そしてぬめる上着、に麗しき日本。あ、依依。

奉戴

入る人等

ハボン絹莢

遺漏そしてカバンを買いにいこう、まわりくどいひとからげ、いっばいつめこんで。影ふみにあつまる、首まで悪辣、小遣いもっておまえと、その黒い髪の毛、辣腕ハボン絹莢。

ステージ上の。ハボン絹莢。我々は運慶神経の、袖に控え、捲り上げ、剥き出しの、奈落へ入れて、擦れて、ビートルズ来日で失われた、ゲートル抗日で、快慶重刑の、袖を引かれ、たくし上げられ、露われ始めた、自体の気持ち。ハボン絹莢。堀は埋められて、は掘られ。睡蓮は満ちる陣は尽きる。閉幕。

完投、果て一途

死してしとめ

溢れる土のしとね

初夏からの匂い

プレイ。ボール。

売り子の売りものスタンドプレイ

穴に入ればいいんですよ。

ハボン絹莢

雑居の床屋のまぬるい猫、発条仕掛けの発情じみた鳴声に目覚め。ハボン絹莢。が前髪を切り揃えていく、日本の前髪越しの眉に、沿う、ハイブリットな、寝相の、初恋に震えてしまい、整髪後の滴に湿る耳朵、通り路、それでは日本へ。出雲のように釣り銭、勘定違えて、目配せて、店を出る。よおこそお。ハボン絹莢。の声が後から。乗っかかり。揺れ。そしられ。

マキシマム。ザ・胡乱の世の、後朝の、待てども返らぬ痴れ事、乱れ髪から霜降りの声まわりに。すなわち長虫の跡がそのまま帰路と重なる、物語り細(ささ)細めきじみた破茶碗で干す、ときに日本艶めいて。ハボン絹莢。身を。凝らしゼットン模型台、重臣の、逃げる、夏の虫、それが長虫。汝(な)汝(な)がMUTI、座敷の虫。日本の夏。の息。逆立ちのまぬけ。やや、虫忌。

焦土のそここの穴ぼこ

入り、出ない。

出ない、入る。

背理、ゼロ・日章旗

まんがん、グランドファイナール

ハボン絹莢。ケ。

福島敦子

空

空が高くて泣いた

空が大きくて泣いた

泣いていたら疲れてくるので

疲れ果てるまで泣いた

破れたところの穴にざわざわ水が押し寄せて

あふれ出した

しょっぱくてそれは

海の水だと気づいた

どうしてこんなときも海とつながっているの

歩くとたぶんたぶん揺れて

海を運んでいるみたいだ

わたしが歩く

海が歩く

空が高くて泣いた

空が大きくて泣いた

海に空が映ってわたしがいなくなる

わたしがいないのに歩いている

どこまで行けばいいの

どこに向かっているの

おーい いまここはどこですか

寂しくないの

軽くなっていくの

ふわっと

空ともつながっている

軽くなって 軽くなって

歩いている
声にならない声で叫んで
それは祈りかしら
歩くって祈りかしら
歩き続けるって祈りかしら
淡々と透明なわたしが
たんとと歩き続けるってことは
破れても
敗れても
歩き続けるってことは
祈りそのものなのかしら

青

祈りって目に見えない
祈りってなんだろう
祈ってくれなくていいから行動で現実を変えてよ！
と叫んだ日も遠くなり
また祈っている
祈らなくてもいい日がきて
祈っていた言葉さえも忘れて
やっぱり
ぼかんと海と空がそこにあることに気づいたら
わたしはゆるされて
海に向こうに還れるのでしょうか
一瞬 青くなってきたらめき
またすうっと透き通って

歎けとて

月前恋といふころをよめる

歎けとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな

西行

若草山の山焼きのとき、山を焼く火が放たれる直前に別の火を放つて、山を駆け下りて逃げたというカッブルとはよく酒を飲んだ。彼らのあいだにはもう赤ん坊がいて、女の子だった。その名前は敦賀にある大社にちなむものと教えられた。三日にあげず酒瓶を提げて彼らの寓居をおとずれた。私も貧しかったが、彼らも貧しかった。せめて収入が二万円あったら、と言うので週に二万かと思ったら、週ではなく月に二万ということだった。それでも不思議なことに酒代はどこかから湧いて来、酒の肴は女のほうがおホゲツヒメの神のようになどどこから調達してきた。赤ん坊がおとなしく眠ったあと、深更に及ぶ酒宴がえんえんとつづく。女は酒を好んだが、そういう女でないと付き合つてはいられないほど、男のほうは大酒飲みだった。家の中のみならず、昼夜を問わぬ屋外でもよく飲んだ。花のころや紅葉のころ、さすがに若草山の火付けのようなことはやらなかったが。この家にやってくるのは私ばかりではなかった。彼らの知り合いや私の友人などもここに来て酒を飲むようになる。人間関係が段々複雑怪奇になってきて、やがて素乱を極め、彼らは別居することになり、赤ん坊は男の実家に預けられた。別居はしたが男は女の借りたアパートに通うようになる。私も男にしばしば同行して、また昔のように三人で酒を飲むことがあった。女の借りたアパートの部屋はまだ緑濃い郊外の谷あいにあった。ある春の

真夜中、近くの神社に一升瓶を持って三人で忍び込んだ。深夜だが花の盛りのところで、もうすでに散り始めている桜の花びらが、満月の光ごしにかがやいていた。一杯また一杯と、一升瓶から直接紙コップに注いだ酒を傾けてゆく。社殿の背後は真の闇で、充実した何かでいっぱいだった。だれ一人として口を開かない。この沈黙の夜のただなかで、非常に饒舌なものたちの、途切れ目のないささやき交わしを聴いた。やおら私の口を衝いて出ようとする凄まじい喜びがあると知った。痛いほどの月光下で、けれども、それを人の言葉に変えることは、到底できそうになかった。その後いくら誘っても、特に男のほうは決して神社に行こうとはしなかった。彼らはそのあとに、別れたりまた一緒になったりしたが、結局は二人ともぼらばらになってどこかに消えた。もしかしたらこれらのことどもはみんな私の所為せだったのかも知れない。だが、歎けといつて月が人に物思いをさせることがあるうか。月に計らいはないのだ。かがやく夜の月にかこつけ誣しいるようにしてともに溢れ出る、人の喜びの、歎きの涙よ。

野生の子猫

午後、阿寒の渡辺さんのところまで古材の整理をしに行く。片道約50キロ。牧場と、なだらかな山々にはさまれた舗装路をひたすら走る。車は少ない。一台とすれ違い、またしばらく走って一台とすれ違ふといった感じだ。途中、鹿などを見かけたり、空の様子が素晴らしかったりすると、ついつい助手席のカメラに手が伸びる。

鹿を狙うときは、車の中からそつとレンズを向ける。外に出てカメラを構えると、すぐ林に逃げ込んでしまうからだ。カメラと鉄砲の区別がつけられないのだと思う。危険じゃないよと教えてあげたいが、鉄砲で撃たれる意味さえ分かっていたら、写真に撮られる意味など知らなくても不便はないだろうから、仕方がない。それより、カメラと鉄砲のふたつの構えは、同じような殺気を発しているのかも知れない。

渡辺さんの家は、阿寒の原始林の縁にある。敷地がじかに原始林とつながっている。初めて会って、原始林の虹鱒釣りに連れて行ってもらった帰りに、

「軽トラ三台分くらいなら、薪にして持っていった方がいいぞ」と言ってくれた丸太の山は、畑の縁とも原始林の縁ともいえる松林を伐り倒したものだ。

その広い敷地を、いつもたいてい重機を操りながら動き回っている。トラックで黒土や堆肥を運び込み、重機でどどつとならして畑にしたあと、奥さんがひとりで種を撒き、ひとりで淡々と苗の手入れをしながら、ささやかな収穫を待つ。年金生活のふたりの質素な日常スタイルだが、細々という感じとは違いかも知れない。

着いてすぐ、古材の山に子猫がいるのに気づく。作業中の渡辺さんたちには声をかけない。

い。

子猫は一匹ではなくて、三匹いるようだ。白黒のぶちと、うす茶色の弱々しそうなものもいる。近づこうとすると、三匹が連なつて古材の下に潜りこむ。離れると、また出てきて、古材を縫うようにちよろちよろ走り回る。片方の目のまわりに黒い囲いがある子猫がとくに活発で、兄弟たちの先頭に立っているように見える。あぶなかしい足取りで精いっぱい緊張している感じがとくにかわいい。

「おいで：」

しゃがみ込んで手を差し出してみた。腹が減っているのではないかと思う。

「おいで：」

手を差し出したまま、にじり寄ってみる。わたしが動くとき、その空気圧に押されるように、するりと身をかわす。白黒の子猫を盾にするように、陰で他の二匹が右往左往している。簡単に捕まえられそうで、そうはいかない。身構えたり、わたしと睨み合ったりするわけではなく、警戒して完全に姿をくらすつもりもないようだ。目を合わせないまま、わたしの動きを読んでいる。以前、東京の団地のベランダで野良が子猫を産んだときは、ミャーともミーとも声を出さずに親の帰りを待っていたが、他の動物と遭遇したときには決して目を合わせないという本能の、あるいは親猫の教えでもあるのだろうか。

ひとりでは動かせない長い古材の下にもぐりこまれるとなんともできない。あきらめて他の材木から片付け始めることにする。いずれは全部片付けないといけないのだが、そのときは子猫たちをどうしたらいいだろう。

古材は何年ものあいだ草地に放置されていたので、苔や茸がはえていたり、腐れかけていたり、ヤスデやミミズの巣になっていたり、

かなり汚れている。きれいにしてみないとどこまで使えるか分からない。貰っていく材と、そのまま残しておく材を選んで整理するのはなかなか難しい。雨に濡れているときは駄目なように見えても、炎天下ではまだまだ大丈夫そうに見えるりする。残った材は薪にする。と渡辺さんは言うのだが、薪にするのは惜しい。なるべくなら生かして使いたい。

古材はもともとは立派な素性のもので、昭和初期あたりに建てられた大きな家を仕事で解体したときに、自分の家をそれで作ろうと思つて、丁寧にばらして運んできたものなのだそう。ちゃんと保管して計画を執行していれば、今ごろは渡辺さんの豪邸が建つていたに違いない。

渡辺さんの話では、
「あなた、家ができあがるころには何歳になつていと思うの？ そのあいだ、遊んだ方がいいんじゃないの？」と奥さんに諭されて、敷地の隅に放置されることになつたらしい。
「たしかにそうだ。会社の連中にも同じことを言われたよ」

休憩にやつてきた渡辺さんと奥さんと、古材に腰掛けて話をする。奥さんはなにもかもゆつたりとした動きをする人で、煙草を吸うときもゆつたりとおいしそうに煙を吐き出す。畑仕事もけつして無理をしているようには見えない。淡々と休みなく動いているうちに、いつのまにか隙のないきれいな仕事ができている。渡辺さんも煙草を吸うのだが、どんな吸い方をしていたか、なかなか思ひ出すことができない。落ちていく吸殻を見て、渡辺さんのだと思つた幾つかの記憶の方が鮮明だ。なぜだか分からない。もしかしたら、まったくの想像だが、渡辺さんが猟をする人であることと関係しているのかも知れない。

「子猫がいますね」
「ああ。今朝来てみたら、いたんだ。誰かが捨ててつたんじゃないかな。夕べはいなかったからな」

「餌はあげるんですか？」餌をやりたい衝動にかられて言つてみた。

「いや、餌はやらない。やらなければ、そのうち狐かなにかが持つていつてしまふんだ」
「狐ですか」

渡辺さんは平気な顔をしている。奥さんも平然としている。

狐は、どこにでもいる。牧場沿いの、人家近くの道端で猫を見かけたりすると、それが狐でないのが不思議に思えるほどだ。道端の草むらは、狐がしばしば走り込む場所でもある。昼間でも、猫には安全とはいえない場所だと思ふのだが。

子猫たちが狐に発見されるとしたら、匂いを辿られるのだろうか。それとも体温とか、不用意にたててしまった物音などで感づかれるのだろうか。いくらすばしくても、子猫たちが狐に発見されるのは時間の問題に思える。ひと晩かふた晩で、あつけなく見つかつてしまふそうだ。頑張っているあの子猫が一番先に捕まつてしまふのではないだろうか。狐が入り込めない狭い隙間があつたら、捕まらずにすむだろうか。

夕方になつて肌寒くなると、子猫たちはもう姿を見せなくなつた。

二週間ほど経つて、渡辺さんがトラックで古材を運んでくれた。散らかり放題のわたしの敷地に、汚れをかぶつた古材の小山ができあがる。一本一本の古材と向き合うと、頭の中の図面ではなく、古材に導かれて作つていくしかないような気持ちになつてくる。

その古材に腰掛けて休憩する。地面にはすでに、吸殻が落ちていく。

「猫はどうなりました？」

「まだいるよ」

「えっ？」

「親が餌を運んでるみたいだな」

渡辺さんの声が、感心しているようにも無念そうにも聞こえる。

「やつぱり、野生の猫だ」

野生の猫、と渡辺さんは言った。野良猫ではなく。あの子猫たちが自力でどこかへ行つてしまふまで、残りの古材が動かされることはないような気がする。

倉田良成

もうひとつの南島——清水あすか詩集『毎日夜を産む。』読解

* (承前)

ここから今にいらっしやい。

わたしは子どものほほに指をつけ

一つを噛み、口うつし、またことばを噛み、言つて聞かせる。

「まるで今まで生まれた子のように、わたしはおまえがかわいらしい」

水海山みづみやまとはまるで海のがん、水の湧なこ山と言おじや。

耳元に言われたとき、くすぐった息が出て

わたしはそこへ建つという、一般廃棄物管理型最終処分場を身ごもったのです。

この体の毛穴にぶったつ木を伐採し

口から腕を刺し、中を掻いて工事する。

男衆が土を掘り道具を洗い、女衆が土を固め道具を研ぐ。わたしはそして

十月十日を守り、ふくらびた腹からのうたに応える。

「洋洋、周りにはみんな、おまえを女の子だと知っていますよ」

雨が透明にふくらむ水場、いもりの腹は手に付いてぬぐう程赤い太陽の沈む色。

さびた背中は青寒く、ここで卵を産む。水が

からだをまあるく指なぞり、金の目がほそい声で方方にうたう。

「知っていたことでありましょうが

子どもがこがんいとおしく生まれました」

ブレハブのお堂で、となりととなりとも手を持ってじゅずでつなぎ、

なむあみだぶつ。詠唱する。なむあみだぶつ。終わったら

としようりは急いでゴザを寄らせて、子どもに駆けつけ

又はこしらえたばかりのよだれかけを、早くしたかったと、地蔵の首にかける。

「わかつてあることではありませんが、

子どもが生まれるとはうれしけことでございます」

としようりが足で水をはね

その音にいもりは固まって、右を見る、左見る。

4 tトラックがアスファルトの上、土を運ぶ、石を運ぶ、木を運ぶ
和讃を運ぶ、昔も運ぶ、女を運ぶ、山びこを運ぶ、手拍子を運ぶ
あの搬入道路こそ、わたしの産道でございます。

旧水海山地区一般廃棄物管理型最終処分場
それからわたしを産んで下さい。

この作品では八丈語の使用はあまり顕著ではない。ほぼ、共通語で考えていつて支障ないと思う。ただし、作品のストレートで骨太の印象とは掛け違って、それを「解釈」してゆこうとする一筋縄ではゆかない部分に多々行き当たる、といったところだろうか。私の数え方では全九連三十七行。おおむね連ごとに考えてゆく。

第一連は、そのあとの展開から考えると逆説的表現にほかならないが、「まるで今まで生まれた子のように、わたしはおまえがかわいらしい」等）、しかしこの逆説的表現は、おそらく母親でもある作者の、子が生まれたとき、育てているとき、ともに密実な時間を過ごしているときの、逆説的ではない体験に根ざした豊かな感覚に裏打ちされているので、これを読む側の分裂した感じもさいしょからひとかたならぬものがある。このときの「母」は「わたし」であると同時に、年齢や世代を超出したグランドマザーのイメージとも重なる。キーポイントは「今まで生まれた子のように、」というところだろう。この「子」は、まったく新しい恐怖としてのみどりの予感がある。

第二連。「水海山とはまるで海のがん、水の湧こ山と言おじや。」これには、八丈語の解釈が必要であろう。一読して誤解しやすいが、「海のがん」は「海の癌」ではない。先に引用した「満ちたりや、海を出せ。」中に、「われは今日になりなんで、なんでこがん何もわからなくなろだろう。」とあった「がん」と同じものである。また、当該の詩の第五連にも、「子どもがこがんいとおしく生まれました」という行を見る。この場合の「こがん」は「こんなに」「このように」の意と思われるが、あるいは「がん」は「こと（如）」に相等するか

もしれない。「このように」「こと」いずれの意でも、「海のがん」は「海のように」となり、第二連一行目の意味は「水海山とは海のように、水の湧く（湧こ）は八丈語特有の連体形（山と言うのだ」と読み下される。その清浄な山に建つという「一般廃棄物管理型最終処分場」をこそ、癌と言うなら言うべきか。だが、それを「身ごもった」というのだ。

第三連および第四連。ここから子を生むための「工事」がはじまる。おのれ自身を産屋とするような、残酷な「工事」。それから「男衆」や「女衆」が動員されて、土を掘り道具を研ぐが、これは産屋である「わたし」を掘ったり固めたりするものであり、そこで「十月十日」が守られる。ここで「ふくらびた腹」（膨れた腹の意であろうが八丈語のニュアンスまでは伝わらない）という言葉が出てくるが、この「びた」（びる）は、大元では「ひからびた」の「びた」（びる）と同じものではないだろうか。共通語でもっと進んだ形は、名詞についてちよつとした価値観を明示する「ひなびた」「おとなびた」などであろう。ただし「ふくらびた腹」というのに、同様の価値観の明示はない。ふくらびた腹からは「うた」が聞こえるのだ。「洋洋、周りはみんな、おまえを女の子だと知っていますよ」このときなぜ「女の子」でなくてはならないか。じつさいにも女の子の母親であるらしい作者にとつて、この同性の連続ということはじゅうぶん意識されていることではないか。これを図式化すれば、わたし・娘Ⅱ（島Ⅱ）（わたし）という連続性である。子を生む性である「わたし」の子が、また女の子であるということが、島と「わたし」との関係において言祝がれている。そういつた背景が、「一般廃棄物管理型

最終処分場」を身ごもるといふことにはあるのだ。ちなみに「海洋」には海のイメージがあると思うが、赤ん坊をあやす島の詞であるようにも、またそうでないにしろ、島詞の歪力で成形された間投詞のようにも受け取れる。

第五連。ここで産屋としての「わたし」はまたいっぽうで、産卵する「いもり」になぞらえられる（いつの間にかそこに移行している）。その「いもり」の腹は「手に付いてぬぐう程赤い太陽の沈む色」をしている。これは雌ではあるがまさしく婚姻色と言えて、その場所に卵を産み付けることによって生き、かつ死すべきトポスとしてのイマージュを読むものにもたらず。トポスとは生き物が発生する神秘の場としての「水場」であり（「雨が透明にふくらむ水場」）、つまりこれこそが「水海山」にほかならない。そこは「いもり」ばかりとは限らない、たとえば生まれた川に遡上し、生まれた場所で婚姻し産卵し死んでゆく鮭の影像なども重ね合わせられるだろう（「さびた背中が青寒く、ここで卵を産む」等）。そういう意味で、水海山とは「島」の単なる一地区たることを超えて、「島」そのものの表象、あるいは「島」を読み解くために必須のアイコンであると言えよう。「知っていたこととありましようが／子どもがこがんとおしく生まれました」だがこれはいったいどういう言明であろうか。この作のさいしよに述べた読む側の「分裂した感じ」は、不完全燃焼感ではない、詩的な深淵を湛えたクレヴァスの感じを読む側に与えつつける、そういう二行であるのではないか。大人たち（老人たち）

Ⅱ「島」にとつて、生まれ出でる新しい生命は切実に祝われるべきものであり、それが同時に「一般廃棄物管理型最終処分場」であるという、メタファーの痛烈な力。

第六連から第八連。生まれ出でるもののため大人（としようり）たちがする、祝祭儀礼と見ることが出来る。ただしそれは、工事現場にある現場事務所などの「プレハブのお堂」のようなものを思わせるところでおこなわれるのだが。そこで「なむあみだぶつ。詠

唱する。なむあみだぶつ」と執りおこなわれる法事は「子ども」の誕生を祝うものであるけれど、それがなぜ地蔵講のようなものではなくてはならないのか。もとより「島」に伝来した仏教は、もともとは相模国からもたらされた浄土念仏系のものであるらしいが、その点はこのあたりの箇所にもみとめうるし、また「島」でじつさいに地蔵講に似たものが子どもの誕生祝いをふくむものであるかはわからないにしても、この「プレハブのお堂」でおこなわれる誕生祝いは死の匂いがする。

「としようり」はその場に「急いで」「駆けつけ」「早くしたかった」と地蔵の首に「こしらえたばかりの」よだれかけをかける。この急迫感、詩に引き直してみれば詩行が孕む切迫した速度感ともいえるが、これは生誕（子どもの）と死（最終処分場建設）の分裂した二つのパートが、次第にユニゾンの終末に近づいていることを意味していると思う。「としようり」は暴力的なまでに「足で水をはね」、妊婦や「女」の寓意を持たされた「いもり」が左右をきよるきよると見回す。4トントラックがアスファルトを敷いた道路の上、土を、石を、木材を運ぶ。ばかりか、「和讃を運ぶ、昔も運ぶ、女を運ぶ、山びこを運ぶ、手拍子を運ぶ」。つまり半分以上は過去という有機物から出来上がっている「島」の時間のほとんどが、全速力、突貫工事で運び去られてゆくということなのだ。そして決定的な「あの搬入道路こそ、わたしの産道でございます」の一行は、また二重の意味を持たされることになるだろう。つまり「わたしの産道」とは、「わたし」が女性性として有する産道なのか、あるいは、「わたし」が「子ども」として生まれてくる、そういう意味での産道なのか。

第九最終連。最終連は以上の二重性の一つの答えを与えるものだ。いままで「わたし」が生むものであった「子ども」が、そのまま「わたし」にほかならないということ。先の図式を思い出してほしい。わたし…娘Ⅱ（島）…（わたし）という連続性を。「島」と「わたし」、母でもある「わたし」と子どもである

「娘」とが、ある意味で通底し合うことが確認される。これが、見えにくかったこのあたりにおける、主格の双面性の背後にあるコンテキストと言えよう。最終行の「わたしを産んで下さい」の、「わたし」でもある「娘」、という滑り行きは、また一方で「島」でもある「わたし」、という滑り行きを意味する。その母Ⅱ女なる肢体は本当は、スサノオノミコトによって殺されたあとに「頭に鬻生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき」（古事記）というオオゲツヒメのような沃野でなくしてはならないはずなのに、それを「旧水海山区一般廃棄物管理型最終処分場」にしようというのだ。ここで、さきの第八連の一行

せつかくのちゆうしやじょうを

すいでんにしないでください

せつかくのしんごうきのねもとで

りくとうをそだてないでください

あぜはぶっこわしてよいです

なわしろに二重に撒きちらして

のうやくのかわりをうまから

ぶちのもようで剃ぎとって

きれいに投げおろしてください

（藤井貞和「祈願詞」部分『神の子犬』より）

私たちがこれらに見るべきは、過去に差し向けられているようでありながら、ほとんど手遅れになりかけている現在のクリーズを、怖ろしい高みから投光しつづける予言性であり、その予言性というものは、本来的に詩が属性として有しているところのものであつた。「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり」という古今和歌集仮名序の言葉を、昔人の迷妄と軽々に考えるべきではないだろう。現在何かが露出しかけている。清水あすかは未だ名づけることを得ないその体現者の一人である。

*水海山の最終処分場に関しては、八丈島において

よりもさらに決定的な、「それからわたしを産んで下さい」という最終行が宣告される。これから」と、空間的な所在を示す「それから」と、二重の意味がかさなり透けて見えている。前者と取ればある荒廃の徹底ののち、後者であればその荒廃の場所（たる産道）から、「わたしを産んで下さい」と言う。これは抗議の言葉などというものではないだろう。厳粛にして怖ろしい、託宣の詞である。

これらの連を閲覧するとき、やはり一つの詩を思い浮かべないわけにゆかない。もつと屈折しているが、清水あすかと同じような匂いが感じられるのだ。

以下の背景があることを註しておく。（筆者）

水道水源より標高が高い水海山に一般廃棄物管理型最終処分場を建設することは無謀であり、水文地質（地下水）基礎調査を行っていないのは環境アセスメントの定石を逸脱している——／6月9日の八丈町議会において、管理型最終処分場の事について一般質問が行われた。という内容が。／将来の水の安全のために、地下水調査の必要性を訴えた……とある。／その中で、日本環境学会前副会長・板巻幸雄氏のコメントが紹介されていた。／「環境地質学上の一般論として、水源より標高が高い位置に処分場を建設する事の危険性に言及した。」とある。／「地下は玄武岩質で水がよく通るといふことは、万一の場合汚染の拡大が抑止できない構造である。」／「処分場の地下に敷き詰められる遮水シートは寿命の50年説は過大値で、完璧に施工・管理された場合で

も、15年程度と言われている。」／さらに、／「水源より上位に処分場を建設すること、谷間や窪地を埋めることは絶対にやってはならない。」／このことから、水海山に最終処分場を建設することが、島民にとってどんな危険をはらんでいるのか、気付いてもいいのではないのだろうか。(南海タイムス6月13日(金)号の中から・ネットより再録)

confidence

父の幻覚がひどくなったので、熊牛から足寄の実家に連れて帰る途中、前方の空がきれいな夕焼けになる。夕焼けがどんなふうに父の目に映っているのか気になって、訊いてみた。「雄大だなあ、と感ぜるときもあるし、そうでないときもある」と父は答える。雄大かあ、わたしなら、きれいで止まってしまいそうだ。「それだけじゃなくて、もっと細かいこともあるぞ」と父は言う。写真を写していた父のことを思う。

(木村)

E.E.アプリのサンシャイン牧場によって一日のリズムが支配されております。もう久しく顔を合わせていない知人たちの一日のリズムが透けて見えてくるというのが恐ろしい。でも、あと一か月もすれば、みんな飽きているだろうな。みんなが飽きても最後までやっていそうな自分を考えると今から憂鬱です。(長尾)

前号の後書で、オリエンタルショートヘアのことを書きましたが、その後、面白い文章が思い浮かばなかったので、別のことを書いてみます。先日、ある年配の詩人から、「君はもう、詩法が確立しているのだから、それほど一所懸命になつて詩集を読まなくてもいいんだよ」と言われ、ひどく驚きました。僕の「詩法」は、「確立」していたのか、と。今日、1片の詩を書いたのですが、「詩法」のことを考えるとポエジーが萎えそうになるので、書くのに苦労しました。結局のところ、納得のいくものが書けましたので、一件落着と相成りましたが、ポエジーにとって、批評は諸刃の刃だと、あらためて実感した次第です。(そ

ういえば、あのサブカルチャー専門誌『ユライカ』も、看板に「詩と批評」を掲げていますねえ(伊達さんが泣いているぞ、山本充!)。(野村)

最近、意味もなく、ないからか、「さえずり」「つぶやき」というのだろうか twitter というネット上の書き込みをやりはじめた。これは独り言を記録しておくという意味で言えば、画期的なものであり、それを読まされるものから言えば、屁のようなものである。(水島)

先日、久しぶりに京都に行き、六波羅蜜寺で空也上人立像にお会いしました。若い頃、近くに住んでいたのに、そこは行っていなかったのです。高校の時、日本史の教科書を見て、なあなあ、これって南無阿弥陀仏って口から阿弥陀様が出ているんやで、きゃーすんごおいいいと騒いでいたことを思い出しました。京都はいいな。国宝。重要文化財。わけも分からず休みになると神社仏閣に出歩いていた日々。懐かしい、また住みたいな。今住んでいるところは何もないのです。海と空のぼかんとした青さ以外には。本当に何も無い。見つめていると青く染まっていきそうです。しかし、それはどこからも何からも指定を受けていないわたしの大切な宝です。(福島)

今日ひさしぶりにCD屋に試聴しに行つた。ステイキングの新譜は子守唄のようにさみしくよかった。でも俺は金がない。音楽はいいなあつて最近しみじみ思う。踊つたりふるふるできるから。こないだ聴いた吉幾三の「津軽平野」も、ジョン・メイヤー

の歌もギターもそうだ。もう太鼓叩いたり、なんでも愉快なら、切ないならいいじゃないかと思う。ぼろいコンポからだって乗れたらいいのだ。鑑賞だけじゃなく誰だってギターや三味線やその辺のものを叩くと音楽になる。またマイケル・ジャクソン追悼コンサートでのステイビー・ワンダーの歌は本当に深く深く魂が入っていた。こういう歌を聴くと、それがどんなものであろうと、演歌だろうが、ソウルだろうが、ロックだろうが、サンバだろうが、お経だろうがジャンルなんて関係ないんじゃないかと思ってしまう。僕は年をとったんだろうか。高校生の時聴いた日本のバンド、ユニコーンのメンバーも40代半ば。生きている限り死ぬから、それまでは、ひとつひとつの音や言葉が、自分を羽ばたかせ、自分を越えたものによってみたまえたいものになって思う。(石川)

猟師のひとが猟犬を連れ山に入り山のものをつまみ、その肉がいただけの季節になりました。そろそろ火鉢を出して二十四時間いつでも餅が焼けるようになります。(タケイ)

今回のテキストには、かなり多数の「仕掛け」、というか「隠れキャラ」を潜ませています。またそのように見せかけて、その実、何もいかなかったというダミーもいるかもしれません。当然のことながら僕の預かり知らぬところで自生している「隠れ」もいる可能性は否定できませんし、多重的にそれらは複雑に絡み合い、「メタ隠れ」としてゆらめいているものもいるはずです。どうか一つでも多くの「仕掛け」や「隠れ」を見つけてください。そのようにして楽しむためのテキストです。元来すべてのテキストに言えるはずのことをわざわざ言わねばならないことは、正直辛いのですが、

今回は僕が最も楽しんで作りましたので、このようなことを書かずにおれなかったですね。

それと、僕はいつも感情的にテキストを作っています。一緒に泣き、怒ってください。でも、そのとき僕はもうそこにはいません。(高塚)

母が救急車で搬送された日の夜、サントリーホールで券が当たって中川俊郎のオーケストラ曲を聴いた。

この十年で五指に入る…いや、ベストと言おう！ 根源的な励ましが、音楽には有るのだという意味で。逆にいえば、やはり生きるには勇気が要るのです。

Der Doppelgänger は、中川俊郎作曲『影法師』F. シューベルトの同名の歌曲その他による』(和田)

決定論のつもりで言うわけではないが、現在の社会の閉塞感、一人二人の天才の出現などでは到底破れそうもない気がする。この爛熟の深さから推して、やはり一つの文化文明を形づくってきた大きな時代区分が終わるのだろう。こんなにコトワリとしての言葉が、他のコトワリによって相対化されるという意味で、無力であった時代は、そう無いのでないか。あるいは一時代一国の終末期はこんなものなのかもしれない。ローマの終わり、宋代の終わり、李朝の終わり、平安や江戸の終わりなど考えてみても、多くの英傑と呼ぶに相応しい人物の輩出をもってして、如何ともなしがたかった。希望はどこにあるのかということとを推量すると、言葉ではない表現形式にある気もする。絵画や音楽など。それらに通底するのは表層を突き抜けた深層のコトワリであり、われわれにとって真の具体性であり続けるものだ。そういう意味で、詩も未だ希望を語れるのではないか。(倉田)